

木琴デイズ

木琴という楽器は地味で目立たない。子供の玩具と低く見られることもある。その木琴の地位を高め、魅力を世に知らしめたのが平岡養一(一九〇七—一九八一)。

著者は現代の数少ない木琴奏者(マリンバ奏者でもある)。次第に忘れられてゆく平岡の伝記をいま自分が書かねばと思いを定めたという。平岡ははじめピアノを学んだが指が短かったため断念。木琴を選んだ。独学だったというのが凄い。

さらに慶應義塾大学を卒業すると思いい切って渡米。当時、木琴王国といわれた大国への武者修業である。

通崎睦美著(講談社・10995円)

一九三〇年代のアメリカで苦勞したが、やがてラジオのレギュラー番組に出演するようになった。番組は日米開戦まで十年余続いた。戦前の海を渡った勇氣ある日本人である。

戦後は木琴奏者の第一人者として日本で活躍。「お江戸日本橋」が有名だがクラシックの名曲も数多く木琴で演奏した。

演奏は明るく力強い。ミスタッチなどものともせず前に進む。戦後の子供たちに音楽の豊かさを教えた。

著者は十歳の時に平岡と同じ舞台に立ったという。その縁もあり大先達への思いのこもった力作。(川)